

UIFA JAP●N NEWSLETTER

■主な内容

UIFA ウィーン大会報告会
ド・ラ・トゥール会長訪問記
地域からの発信—名古屋からの報告
地方からの発信を大切に
名古屋の値打ち感覚
わたらしい住まいづくり
環境と共生する住まい
ユニバーサルデザインを考える
UIFA会員の本
役員会報告／役員会からのお知らせ



UIFA ウィーン大会報告会風景

UIFA ウィーン大会報告会

昨年 11 月 24 日(土)、美しい紅葉に囲まれた代々木オリンピック記念青少年総合センターの国際交流棟第1ミーティングルームで UIFA 第 13 回ウィーン大会報告会が行なわれた。参加者は会員 23 名、非会員 4 名の計 27 名。山田規矩子さんの司会で、前半は松川淳子さんの大会概要と正宗量子さんのポストコングレスツアー概要の報告、柳澤忠氏撮影ビデオの上映があり、後半は中野晶子さん、田中厚子さん、谷村留都さんによる報告と石川金治氏のお話、小川副会長の挨拶というプログラムだった。

■共通の思い出をつくって

山本其観代

報告会当日は、ウィーン大会に参加しなかった人も、いろいろな経験や報告を聞きくことで、共通の思い出をつくることのできたと思います。

松川淳子さんのお話は、デジカメによる映像を交え、UIFA 東京大会から3年ぶりの再会風景や情報の交換、パネル展示や論文の発表など楽しい内容でした。ウィーン市内見学、事務局会議での各国の代表者の白熱した議論の様子、今後の会の運営や次回大会のテーマについてなども報告していただきました。展示や論文発表に日本からの参加者が活躍し、また、日本大会の運営の良さに賞賛の声が多く寄せられたと聞いて嬉しい限りです。

正宗量子さんのザルツブルクへのポストコングレスツアーの報告では、湖水地方の美しい風景、ハプスブルグ家最後の皇妃エリザベート(シシイ)などについてうかがいました。ツアーの行程に急な変更があったため、次の予定のある参加者に不都合がでてしまったとの指摘があり、そのことは残念だったと思います。

柳澤忠氏撮影のビデオは、パートナーの佐和子さんのユ

ーモアのある説明がついて、動く映像で楽しく4ヶ月前を思い出しました。中野晶子さんの「オットーワグナー聞きかじり」、田中厚子さんのまた違ったオットーワグナーの建物の説明があり、最後に谷村留都さんが、ウィーンの街や他の都市の街路について報告してくださって、あっという間に2時間半が過ぎました。石川氏が言われた「UIFAの生活者としての視点が大切」、小川副会長の「継続は力なり」という言葉が心に残りました。

ド・ラ・トゥール会長訪問記

北本美江子

ニュースとしては旧聞に属しますが、昨年9月末、プライベートな旅行のついでにド・ラ・トゥール会長を訪ねました。ニュースレターの原稿依頼などで郵便、FAX のやり取りはありましたが、私は日本大会を機に会員となった新入りで面識に自信がなく、もっぱら事務局長の友人であることを強調して試みた訪問でした。

最初に電話したときはちょうどマルセイユに出張の日で、帰宅の日程がはっきりしないからと私のホテルに連絡を頂くことになりました。何とか数日後にオフィスに何うと、ペンキの塗り替え工事中とのことで秘書室でお話しました。オフィスは観光名所であるエトワール広場から程近いにもかかわらず、閑静な通りの一角にあって、ご自宅は同じ建物の最上階にあるそうです。

ちょうどいい仕事があると言われて、ウィーン会議で撮った日本人の写真の束を示され、名前の確認作業を手伝いました。私はあまり役に立たなかったのですが、一人一人に分けて封筒に入れてメッセージをつけるその細やかな人柄に、UIFA の真髄を見る思いがしました。日本人は真面目で協力的だと、古くからの会員の何人かの名前を挙げたりして、今後の活動への貢献を期待していらしたようです。

地域からの発信—名古屋からの報告

UIFAニューズレター編集部では、UIFAが全国的に活動を展開するためには、より多くの会員の方が編集に参加して下さることが望ましいと考えています。「地域からの発信」第一弾として、本号は柳澤理事をはじめとする名古屋の会員の方と共同で企画・編集しました。愛知建築士会女性部会の部長として活躍なさった伊藤さん、谷村さんという新しいUIFA会員を迎えた名古屋からの発信です。



名古屋の会員 左から、谷村、伊藤、藤田、柳澤の皆さん

■地方からの発信を大切に

藤田淑子

1988年の秋、ニースから乗り継ぎの一人旅で、写真家と間違えるほどの大きなカメラバッグを持って隣の席に着かれた女性がド・ラ・トゥールさんでした。そのことがご縁で入会したこの会も、「メリットは自ら参加することにある」と考え、「何とかして参加したい」と思いながらも、宮仕えの忙しさと名古屋での会合が多くなり、2時間足らずの東京への足も遠のくばかりになりました。

その頃、名古屋にも建築士会の女性部会が発足。「何で今さら女性なの」と反対もしましたが、その心配は何処に、今も着実に活動を続けているのがこの部会です。その歴代の女性部長を務められたのが、新しいメンバーの伊藤京子さんと谷村留都さんです。住まい手に喜ばれるいい仕事を着々とこの地域に残され、社会的な会でもご活躍で、頼もしい仲間たちが加わってくださいました。理事の柳澤佐和子さんも宮仕えを離れ、今は生き生きと仕事をしています。こうした方々を中心に、UIFAが地方からも発信できるよう、若い会員の増強がこれからの課題になりそうです。

開催地の環境問題で話題を呼んだ2005年の愛知万博も、やっと予算のめどが立ち、秋には着工の予定です。たった6人の愛知の会員、UIFAの皆様と「愛知で語り合えたらな」と思う私ですが、パワーのある会員を増やすためにも、まず、魅力ある会にする努力とその具体案を考えることが大切でしょう。

■名古屋の値打ち感覚

柳澤佐和子

大阪生まれの私と東京生まれの夫が結婚して、何の御縁もなかった名古屋に来て40年が過ぎた。国際大会で名古屋といっても知らない人が多かった。東京と大阪の真中だと説明した。

名古屋ってどんな特徴があるのときかされると、東京が長男とすれば、大阪は次男、三男が名古屋ということらしい。我家にも3人の息子がいるが、彼らの性格をみてみると3番めは上の2人を見て要領良く生きぬいていくのが分かる。なるほどと名古屋を納得する。

名古屋では、納得しないとなかなか頼まない「値うち感覚」、しっかりした価値観がある。住宅の設計でも「住宅は利益をうまないの、値うちに設計して下さい」と言われたこともある。工事契約に当たって、複数の施工業者から見積りを取り、一番高い会社に交渉して一番低額の会社の値段で請け負わせる例もある。質の良いものを安く造って長持ちさせるのが目的であるが、業者から見ればなかなか厳しい。しかし、景気の低迷の昨今、いかに、品質の高い物を安くつくるか、「名古屋流値うち感覚」が活かされるのではないだろうか。

そのため、この地方は質の高い歴史的建造物が多く残っているといわれている。万博・常滑新空港など大きなプロジェクトが進み出す愛知県、元気な3男・名古屋へ皆さん是非お出かけください。

■わたらしい住まいづくり

谷村留都

愛知建築士会女性部会の「わたらしい住まいづくり」という企画は、一般市民向けのセミナーで、「住まい方はその人の人生そのもの」という考えをベースに建築のプロと他のジャンルのプロ、そして一般の市民の3者で住まい方を探ろうというものです。今回10年間の内容を再考する機会があり、仲間と話し合う中で、私達の取り上げてきた「集まってすむ」ということの究極のテーマは「食べる」ことではないかということになり「あなたは誰と一緒にご飯を食べているか」というアンケートを取りました。対象は建築士、その知人、住居学を勉強中の学生(女性)ということだったので、データーとしては偏りがありますが、以下のことから「食べる」ことを切り口に住まい方が少し見えてきました。

- ① 誰かと一緒に食事をするのは楽しいし、心身の健康にもつながる。しかし、誰かが犠牲になって食事作りをしなければならない(特に主婦)、自分の自由な行

動が規制され、やりたいことにストップがかかる。

- ② 子供に面倒をみてもらうことを期待している人はなく、2世帯住宅の占める割合が多いこの地方でも、これからの予備軍の人たちは、子供との同居の物理的困難さを覚悟している。同世代の人(配偶者や友人)達のほうが自分たちと価値観が近く楽しめる。

ここでいう「集まってすむ」ということは集合住宅の方法論ではなく、どんなコミュニティが居心地がよいのか、1戸建住宅に住む場合もコミュニティは必要という考えです。とはいえ「集まってすむ」というからには具体的な事例の考察も必要なので、この10年間の建築雑誌に発表された集合住宅で面白そうなものを選び、公営と民間に分けて考察しました。

A 公営：土地の購入の必要性が少なく、永住が可能なゆったりした配置計画。中庭、道空間、テラス、間口が広い住戸などの構成で戸建住宅に近づけようとしている。

B 民間：狭さをカバーするため、メゾネット、吹き抜け、可変性などで工夫したり、木やコンクリート打ち放しを使用し戸建住宅に近づけている。(詳細は下記*)

先日ある基調講演で上野千鶴子さんの話を聞きました。学会の雑誌でも山本理顕氏との対談があり、公営集合住宅をつくる建築家と、その後の住民の意識調査をする社会学者とのぶつかりが面白く、一読をお勧めします。コミュニティのとらえ方の対比(空間なのか人間関係なのか)が面白く、考えさせられました。

■環境と共生する住まい

伊藤京子

「環境と共生する住まい」という一貫したテーマで世界の女性建築士の話を名古屋で聞こうという企画に2年前から関わってきました。これは愛知建築士会主催の愛知万博のイベントです。1999年におこなわれた第1回目は日本の各地(東北~九州)から6名の方に集まってもらいました。2001年の第2回目はアジア、2年後の3回目は環太平洋、そして4年後の2005年は世界からという壮大な計画です。

第1回目は日本の方達なので、なんとかかなとスタートし、無事終了しましたが、今回はいろいろな方の伝を頼り、中国や韓国を表敬訪問するという機会にも恵まれました。まずは発表者の略歴と内容を簡単に紹介します。

・中国 趙 曉征 (チョウ ギョウセイ)

天津大学建築学科卒、名古屋大学で修士課程修了後、竹中工務店名古屋支店に勤務。現在は天津の竹中工務店勤務。「中国の環境問題及び環境と共生する住まい」。

中国北部に主に分布している代表的な住居形式「四合院」(中庭式住宅)の実例紹介と、1992年に建替えられた「新四合院」の紹介。天津で施工中の環境共生住宅「梅江住地区」の紹介。

・韓国 崔 宣珠 (チェ ソンジュ)

成均大学造園学修士課程修了後、東京大学都市工学科博士課程修了後、韓国でいくつかの国土開発研究所研究員。「韓国における環境と共生する建築と都市計画の現段階」韓国では90年代から環境が重要なキーワードとなり関心が高まっている。政府による団地では「居住環境優秀住宅認証制度」を導入した。いくつかの集合住宅団地の事例を紹介し生態建築の概念を説明。

・フィリピン マリー アン アラナス エスピナ

Philippines 大学卒業、Massachusetts 大学修士課程修了、UP College of Architecture の助教授。「フィリピンにおける建築の社会的および環境的意義」。建築は宗教、哲学、経済、政治、気候風土と深く係わり合い、各地域の文化を具現するものだが、近年の国際化に伴い気候風土、文化が軽視され、単一化する傾向にあるが、建築家はこれらをもっと大切に考える義務がある。このような見地から歴史的風土を文化に根ざしたフィリピン建築の取り組みを紹介。

・日本 平倉直子

日本女子大学住居学科卒、建築家。「つなぐということ…はじまりもなく終わりもない…」島国日本の北の島や南の島、伝統が引き継がれている京の町屋など、日本の風土、文化が、日ごろの設計活動の原点にあることを紹介。何気ない計画の中にも、日本で培われたスケール感や生活のフレキシビリティがベースにあることを例に取りながら、作品の住宅や施設計画の紹介。

昨年UIFAの会員になり、松川さんに紹介いただいた方と交渉をしましたが、日程等が合わず残念でした。中国と韓国の方は日本での留学経験がありとても上手な日本語を話されました。同時通訳はフィリピンの方だけでしたが、国際会議という雰囲気は盛り上がり、2時間30分があつという間でした。

その後、会場を変えて、地元の建築士たちとの交流会があり、会場では充分聞けなかった話も聞くことが出来、また参加者どうしのコミュニケーションにも役立ち、有意義でした。しかし、次回の環太平洋の企画が頭をよぎり、ホットするのもつかの間です。今回は、UIFAの方たちのご協力とご参加を期待しております。

*平成13年東海北陸ブロック会 女性建築士協議会
ブロック事業発表資料『想いが未来を創る「今日の夕飯
どうする?」』をご参照ください。

〒102-0083 東京都千代田区麹町 2-6-5

麹町 E・C・K ビル 衛生生活構造研究所内

TEL 03-5275-7861 FAX03-5275-7866

メールアドレス uifa@LIQL.CO.JP

ユニバーサルデザインを考える

情報のユニバーサルデザイン

安東真記子

電車の中での風景が変わった。若者のほとんどは携帯電話の画面を眺め、親指だけでメールを打っている。携帯電話はただ話すための道具ではなくなった。

同時に、聴覚障害の人達にとって画期的な道具となった。メールを使うことにより、手話の分からない人も遠くの人も、コミュニケーションが手軽に交わせるようになったのである。

今や誰でも手に入り、障害のハンディも埋めることができるという点で、携帯電話は情報のユニバーサルデザインのひとつと捉えることができるだろう。

だが実際には、画面は見えにくく、操作方法は複雑多岐で、高齢者など使いたくても利用できないという、デジタルデバイドが生じている。今の情報社会は、目覚ましい技術の発展とともに、新しい情報障害も作り出している。

「ユニバーサルデザイン」とは、様々な「デバイド」を排除した環境を作り、できるかぎり使う人すべてのためにデザインすることである。すなわち、情報通信技術の進歩も、より多くの人が満足できる社会を創り出すという、ユニバーサルデザインの目指すところではないだろうか。それは IT 産業だけの問題ではなく、私達ユーザーも情報のユニバーサル・デザインに関わる当事者として考えていく必要があると思う。

UIFA 会員の本

●『健康デザイン 健康をサポートする環境づくり』

柳澤忠監修 (医歯薬出版 定価 3,800 円) 病院環境から生活環境まで、柳澤佐和子他14名共著。愛知県ではじめてのホスピス病棟の建設を市民と共に造った経過、ホスピスの概念、終末期における支援、患者本位の自然の香りや素材を生かした温かみのあるインテリアデザインについて執筆した。



●『増改築住宅設計モデル集』

編集 現代住宅設計モデル集編集委員会 委員: 谷村留都 (新日本法規刊定価8000円) この10年間の建築雑誌、コンクール等500余点の中から50作品を厳選し、単なるリフォーム集ではなく、手法が方法論としての資料になるようまとめている。一般住宅、古民家、集合住宅の3つに分け、住む人と建物の関係の深さに注目。UIFA 会員の中西晶子さんの作品が掲載されている。



■役員会報告

第8回 2001年11月19日 (月)

出席者: 小川、飯島、北本、草野、栗山、正宗、松川、山田、吉田(あ)、渡辺
議事 ・各部会報告
・ウイーン大会報告会準備進捗状況
・未来館展示協力について
・神戸 NGO「市民社会を作る」書籍購読依頼

第9回 2001年12月17日 (月)

出席者: 小川、飯島、草野、栗山、正宗、松川、峯、山田、吉田(あ)、渡辺
議事 ・各部会報告
・ウイーン大会報告会総括
・未来館展示協力 著作、ビデオの寄贈・貸与の依頼
・No.26海外交流の会 (2/16) の企画について

第10回 2002年1月21日 (月)

出席者: 小川、北本、草野、栗山、田中、正宗、松川、峯、山田、吉田(あ)、渡辺
議事 ・各部会報告
・会員交流サロンの企画
・第26回海外交流の会 (2/16) 準備状況
・未来館展示協力について

役員会からのお知らせ

「女性と仕事の未来館 (女性労働協会)」が主催する、「女性と建築展—仕事と家庭の両立を支援する住まい・まちづくりに向けて」の日程が決まりました。

2002年3月15日から8月20日まで、田町の「女性と仕事の未来館」で行なわれます。UIFA JAPON は、図書やビデオの貸与・貸し出しをはじめ、会長、副会長の企画監修委員への就任など全面的に協力しています。お楽しみに!

■広報だより

UIFA JAPON Newsletter No. 50 号発刊に寄せて

・1992年6月 UIFA JAPON 発足、同年12月、会誌 News-letter No. 1 発刊、以来年6号発行の11年余、本年2月無事 No. 50号発刊のときを迎え、感慨を深めています。編集長として35号まで、本業の合間をぬってごく少人数の編集委員での企画、原稿依頼と催促、編集、校正と版下作り、印刷、やっと発行するともう次の号、思わぬ誤字・脱字。その中で第10回南ア大会、第11回ハンガリー大会そして第12回日本大会の特集には力が入りました。さらなる Newsletter の充実に向け会員各位のご協力、ご支援を期待する次第です。飯島 静江

・第12回日本大会に向けて特集ザ・インタビューは、赤松良子氏、石川金治氏、飯田亮氏、松田妙子氏、尾島俊雄氏が応じて下さり、中原会長、小川副会長、松川実行委員長を含め、それぞれ個性あふれるインタビューでなつかしい。35号から若手メンバー増強。活気は倍増。写真とり、テーブル起こしもやれば、翻訳もする。大会後の「レースワーク」「ユニバーサルデザインを考える」など良い企画だと思う。いそがし人間ばかりの編集会議であるが、50号とは! 祝い枱年号 渡辺喜代美
・記念すべき50号は、名古屋の柳澤さん、谷村さんとの共同編集でした。(編集長:田中)

株式会社エアクレーレン

翻訳・通訳・調査研究・情報処理

〒107-0052 東京都港区赤坂 3-4-4-6F
TEL: 03-3586-4454 FAX: 03-3586-4590
URL: http://www.erklaren.co.jp

全国の書店にて
好評発売中
2,600円(税別)

建築ジャーナル
東京都港区麻布台1-9-19
TEL 03-5575-3216
FAX 03-5575-3217
http://www.kj-web.or.jp/



山口建設株式会社

〒112-0011 東京都文京区千石 3-29-26
TEL (03) 3947-3261
URL: http://www.yamaguchikensetsu.co.jp